

天皇免訴と無責任性

日本の戦後史を、記録映像と関係者のインタビューなどでたどるドキュメンタリー映画「天皇と軍隊」。フランスを拠点に活動する渡辺謙一監督は、ある種、容赦がない、海外の第三者目線で戦後の大きな節目を俯瞰していく。日本人が目をそらしがちな史実にも触れる。

日本の戦後史ドキュメンタリー
「天皇と軍隊」
渡辺謙一監督に聞く



焦点の一つは、天皇の名の下で第二次世界大戦を戦い敗れたのに、極東国際軍事裁判(東京裁判)でなぜ天皇の戦争責任が問われず免訴とされたか、それが、その後の日本人にどんな影響を与えたか。

英王立戦争博物館が所蔵する象徴的な映像が終盤に

「天皇と軍隊」より。被爆地・広島を訪ね、大勢の人たちにあいさすする昭和天皇
1947年12月 © 英王立戦争博物館



し、こそつて万歳する、そがましきは見て取れない。こは戦争指導者への恨み その日には米国時間

わたなべけんいち 1980、90年代、TBS系「地球特捜班」、TNCテレビ日本制作「遙かなる空へ」ラーゲリから来た遺書」など、数多くのテレビドキュメンタリーを制作した。メディアの自己規制の厳格化から、97年、共同制作のテレビ局制だけでなく、制作側も著作権を比較的自由に扱えるフランスに拠点を移した。「天皇と軍隊」は、フランスのテレビ局など2009年に制作、欧州など約30カ国で放送された。近作に「クシマ」後の世界(12年)がある。

で、日本軍の真珠湾攻撃、と伝えている。つまり日米開戦の日である。当時、連合国軍最高司令官のマッカーサーは天皇の影響力を統治に生かそうと、天皇免責による「団体」の維持(天皇制の存続)の方向を決めていた。

その行事に込められた古領統上の意図を、渡辺監督はこう読み解く。当時、東京裁判で戦争犯罪者たちが裁かれていて、日本軍の残虐行為が暴露され、国民にも加害者意識が出てくる時期です。(この映像には)マッカーサーの演出があったのでは、と思います。天皇と日本国民が、東京裁判はならないに分析されていまいかかれています。戦争犯罪者の前で許された、戦争犯罪者に問われた導かれた方をした天皇と国民がこれに、と伝える意味がある。

「被爆地であるにもかかわらず、国民は天皇に今も敬意を抱いている。占領政策はうまくいって

の責任感覚の在り方に関わっているんじゃないですか、ということ。渡辺監督は解説する。「狂熱的に戦争戦線動員でかかった総動員に目を着せて、天皇免責と同時に国民側にも生まれたのではないのでしょうか」

天皇の免責が、「責任の所在が不明確な日本の無責任性」の原動力ではないか、という問いかけた。そして現在見られる無責任性とは、渡辺監督は、例えは、福島第一原発事故後の東京電力の対応に見る。「最高責任者がなかなか前面に出てこない。組織の責任体系の任方が、敗戦以来の「重厚」になるんです」

記者会見で、昭和天皇が原爆投下についてお詫言な場面も織り込んだ。「遺つたは思ってますが、戦争中であることですから、広く皇国民に対しては気の毒で

ル上映を予定

詰め問 九段 石井 術 黒先 中から攻めてください。(初級)

あるが、やむをえない」と思っています。「やむをえない」という言い回しは、先敗の場面でも多く使われる表現があるかもしれない。例えば、福島第一原発事故の差は「想定外だった」と言った東京電力幹部の釈明と重なって映らなくもない。史実のあれこれから多々考えさせられる作題だ。(吉田昭一)

◇「天皇と軍隊」は12月5日、11日、福岡市中央区のKBCシネマテアターに